

あすなろ通信

茅ヶ崎高校校長だより
No.13 平成30年1月31日

過去は無理でも未来は変えられる

背番号10。サッカーでは特別なこの背番号を、高校1年のときから付けていた。スタートしたばかりのJリーグで、ジェフ市原のミッドフィルダーとして、ピッチで歓声を受けていた期待の人気Jリーガー。

そのぼくの足は今、車椅子のタイヤとなってコートを自在に駆けめぐる。
※この話の内容は、昨年新春ドラマ「君に捧げるエンブレム」で櫻井翔さんが演じていたので、見た人も多いのではないかと思います。

京谷和幸（車椅子バスケットボール元日本代表選手）

彼は、北海道のサッカー名門校である室蘭大谷高校の出身で、チームの中心的な存在だった。全国大会にも出場し、チームを全国ベスト16に導いた。1試合で3点を取る「ハットトリック」を3試合連続で行ったこともあった。その活躍ぶりは「北海道に京谷あり」と言われ、19才以下の日本代表にも選ばれた。

そして、1990年に「ジェフ市原（現ジェフユナイテッド市原・千葉）」の前身である「古川電工」に入団した。3年後のJリーグ開幕と同時に、「ジェフ市原」のプロサッカー選手になった。毎日遅くまで練習に励み、会社の同僚だった陽子さんとも婚約し、まさに順風満帆の人生だった。

しかし、Jリーガーとして彼が脚光を浴びたのはわずか半年だった。「自分よりうまい選手などいない。俺が一番うまいんだ。」と自信に満ちあふれていたJリーグ1年目の11月に悲劇は突然やってきた。

結婚式の衣装合わせの日の朝のことだった。車を運転していた彼は、他の車を避けようとして電柱に激突した。その怪我はひどく、彼は事故により下半身の機能を失った。彼の華やかなサッカー人生は、あまりにもあっけなく、そして一瞬で終わった。

きのうまでプロサッカー選手として活躍していたのに、今日からはボールを蹴るどころか、立って歩くことさえできない。彼は落ち込み、初めての挫折を味わい、深夜の病室で泣き崩れた。

「二人でがんばろうよ」と、事故後に周りの反対を押し切って結婚した陽子さんが彼を支えた。「正直言って私も悩んだ。でも、主人には私しかいない。私にも主人しかいない。」そう陽子さんは思った。陽子さんに支えられ

た彼は、リハビリのつもりで車椅子バスケットボールを始めた。元プロサッカー選手とはいえ、車椅子を動かしながらのドリブルがすぐにできるはずもない。シュートを打っても、ボールはゴールまで届かなかった。車椅子の操作に慣れていない彼は、練習中に何度も後頭部から床に転倒した。たいした目標もなかった彼は、練習に身が入らなかった。

しかし、子どもが生まれたとき、「この子が誇れる父親になろう」と彼は決意した。この時から、障害がある人たちのオリンピックである「パラリンピック」への出場が彼の目標になった。

練習は本当に辛いものだった。手で漕いで車椅子を操作するため、手はパンパンに腫れ上がった。タイヤを素手で止めるたびに、手のひらの皮はむけた。それでも彼は、必死にボールに食らいついた。相手をひきつけてのパス。視野の広いディフェンス。サッカーで培った彼のセンスはそのまま生きた。同じチームのメンバーの明るさに触れるうち、いつしか彼は「足がタイヤに変わっただけで、何でもできる」と思えるようになった。

やがて彼は、車椅子バスケットボールの日本代表に選ばれ、シドニー、アテネ、北京、ロンドンと4度のパラリンピックに出場した。北京パラリンピックでは、キャプテンとして、また日本選手団の団長として出場した。

彼は次のように語っている。

「ぼくにとって、この事故との出会いが、人間として一回りも二回りも成長させてくれました。事故後の様々な出会いによって、ぼくはいろんなことに気づかされました。そして、車椅子の自分を受け入れ、自分に自信が持てたとき、「これからの人生、俺は車椅子で勝負していこう」と思ったのです。

それからです。あの忌まわしい事故も、一つの出会いと思えるようになったのは……。夢に向かって行動を起こせば、必ず出会いが訪れる。その出会いに感謝の気持ちを持つことで、また新たな出会いが訪れる。そして、夢の実現へとつながっていくのです」

現在、京谷さんは車椅子バスケットボールを引退し、サッカーの指導者を目指して、新たな夢にチャレンジしている。

（参考文献：車椅子バスケットで夢を駆ける 京谷和幸・著 金の星社）

想いを伝えてくれたあなたへ

校長室に届けてくれた手紙を読ませてもらいました。あなたがこれまで感じてきたことが、とてもよく伝わってきました。学校を、そして社会を変えるために、あなたのメッセージはとても大切です。できれば、全校の皆さんにあなたのメッセージを伝えたいと思いますが、いかがですか。また、連絡を待っています。